

## 狂気の原因

—ゲオルク・ハイム『狂人』—

竹内 拓史

(1)

ゲオルク・ハイム (1887 - 1912) の『狂人』(1911) は、ある男が精神病患者の施設を出てから、妻への復讐に赴く途中で数件の殺人を犯し、最後にデパートで射殺されるまでを描いた短編小説である。ハイムの作品が持つ独特の雰囲気と、ハイムが生きていた世紀末前後、世界大戦前という時代から、彼の書いた多くの詩は終末論的世界観と結び付けて考えられることが通例である<sup>1)</sup>。この作品の場合も、一読すると主人公の無軌道とも思われる残忍な凶行や妄想に目を奪われ、そのグロテスクさや残忍さは確かに終末論的世界観を感じさせるものと言える。それどころか読者は「ほとんど吐き気を覚えさせられ、主人公の意識に同化することを拒まれ<sup>2)</sup>」ているように感じさせる。だがその一方で、この『狂人』に限らずハイムの小説では体験話法が多用されているために、短い作品ながら主人公の心情がよく伝わってくる場面が多い。

例えば物語の冒頭から体験話法は既に見られる。施設を出てしばらく歩き畑の中に座り込んだ主人公の男の心に、さっそく施設の職員たちに対する怒りがこみ上げてくるが、その怒りはそれ以上彼がそこにとどまっていたら、「彼らみんなを、全員一緒に殺していたであろう」<sup>3)</sup>ほどである。院長をはじめ副院長も監守たちも、施設の職員はみな彼にとっては憎悪の対象である。それには彼なりの理由があり、彼らが患者の私物を盗んだり、患者に暴行を加えたりしたからであると述べられてはいるが<sup>4)</sup>、しばしば体験話法で述べられるこれらの文章は主人公の心情に入り込んでおり、それが彼の思い込みや幻想なのか、それとも事実なのかは判然としない。しかしいずれにせよ、主人公の男が施設の監守や医者に強い憎しみを持っていることは明らかであるし、一緒に施設に収監されていた患者に対しても「きちがいたち」<sup>5)</sup>という蔑視の言葉を使っていることから、男にとっては職員、患者の別なく彼らと一緒にいることが苦痛だったことが理解される。つまり彼は自分のことを正常な人間だと思っており、それゆえ「そもそもなぜみんなが彼をそんなところに収容したのか」<sup>6)</sup>が彼には納得がいかないし、彼らが自分を施設に入れたのは「単にいやがらせからだ」<sup>7)</sup>としか思えない。自分はその施設にい

るべき人間ではないという主人公の強い思いは、「本当に不当なことだ。本当に恥知らずなことだ。」<sup>8)</sup> という言葉からもよく分かる。

だが物語の終盤、男の施設に対する思いは一変している。彼がデパートで最後の殺人を犯し射殺される直前に次のような一文が出てくる。「今晚このことを病院の共同寝室で他のやつらに話してやったら、みんなすごく羨むだろうな。」<sup>9)</sup> ここでは、その晩に施設に帰ることが彼にとっては既に当然のこととなっている。一体このような主人公の施設に対する心情の変化は、何を意味し得るのだろうか。本稿では主にその点に関する考察を通して、この「狂人」と名付けられた男の一見すると脈絡のない心情の変化や、読者が主人公の意識に同化することを拒み、「感情移入するのが不可能」<sup>10)</sup> であるように思われる残虐な行動が、実は一貫した動機に基づくものであったことを提示したい。

## (2)

嫌なことばかりが思い出され、憎悪の対象でしかなかった施設に対する男の心情に初めて変化が見られるのは、物語が中盤を過ぎたあたり、男が大通りを一人で歩いている時である。彼は既にそれまでに、マルティン・ルターの『神はわがやぐら』を歌いながら「一小節ごとに大きな声で抑揚をつけて、その度にシンバルを打ち鳴らす音楽家のように二人の小さな頭をお互いに打ちつけ」<sup>11)</sup> るという残忍な方法で子ども二人を殺し、さらに道端で知り合いの女性を見かけた時には、「彼女は俺を 17 番地のきちがいだと思っている」ので「俺だと分かったら、俺を笑いものにするだろう」<sup>12)</sup> と考え、首に噛み付き殺している。この残忍な殺人を行う彼は、「獣」「ハイエナ」「ジャッカル」「人喰い」<sup>13)</sup> など様々な比喩をもって表されている。その後彼は記憶を失い、自分がどこにいるのかも分からなくなり大通りをさまようこととなる。そこで彼は「限りなく見捨てられているという感情」に襲われ、「郷愁」にあらん限りの力でつかまれ、「できるならばすぐに施設に戻りたい」と思うのである<sup>14)</sup>。それまでは憎悪の対象でしかなかった施設に対する思いが変化した瞬間である。彼の心にこのような変化をもたらした原因が、直前の「見捨てられている」という孤独感にあることは理解できるが、では一体この「見捨てられている」という孤独感の正体は何なのだろうか。

ゴルトシュニッグやブーンルワンは、ハイムについて述べる際に、ゲオルク・ビューヒナーからの影響について言及しているが<sup>15)</sup>、ここでもビューヒナーの作品とハイムの作品を比較することでその正体を明らかにしてみたい。とりわけ『狂人』は、ビューヒナーの『レンツ』との類似点が多く見ら

れ、この論考においても両者の比較は非常に有益であると考えられる。

既に述べたように、『狂人』の主人公はこの大通りに来る前に子ども二人を残忍な方法で殺している。だが彼は二人を殺害した直後に突然気分が変わり、子どもたちに対して憐れみの気持ちを持つ。彼は二人を生き返らせようと頭蓋骨の割れ目に息を吹き込むのだが、ビューヒナーの『レンツ』にも死んだ少年を生き返らせようと祈りを捧げる場面があり、ブーンルワンは両面の類似性を指摘している<sup>16)</sup>。だが似ているのは死者を生き返らせようとするその行為だけではない。レンツもまた『狂人』の主人共同様に、「見捨てられている」という大きな孤独感を感じているのである。子どもを生き返らせようとする場面でも、「彼（レンツ）にはその子どもが全くもって見捨てられているように見え、そして自分自身も全く一人ぼっちで孤独であるように見え」<sup>17)</sup>る（括弧内と傍点は筆者による）。このようなレンツの孤独感は度々描写されており、物語冒頭の山頂の場面に既に見られる。

彼はとてつもない孤独を感じた。彼は一人ぼっち、全くの一人ぼっちだった。彼は自分に向かって語りかけようとしたが、できなかった。彼はほとんど呼吸することもできなかった。足を曲げると足の下から雷のような音がした。彼は座らざるを得なかった。虚無の中で名づけようのない不安が彼をとらえた。彼は空虚の中にいた。彼は飛び起きると斜面を飛ぶように駆け下りた。<sup>18)</sup>

この場面から分かるように、レンツの孤独感は何か漠然とした大きな不安や虚無感といったものと密接に関係しており、彼はなんとかそれから逃れようとしている。レンツにとってそこから逃れる最後の手段は、神の存在を信じ神にすがることだけであった。神を信じたいという思いと無神論との間で揺れるレンツは、イエスと同じように「立ちて歩け！」と死んだ子どもに向かって叫び子どもを生き返らせようと試みるが、子どもが息を吹き返すことはない。つまり結局のところ子どもは「見捨てられている」ままであり、それはまたレンツ自身も神に「見捨てられている」ことに他ならず、その後レンツは無神論の闇へと落ちていく<sup>19)</sup>。

だが同じように見捨てられているという孤独感に苛まれる『狂人』と『レンツ』の主人公二人には決定的な違いがある<sup>20)</sup>。それは子どもを生き返らせようと試みた二人のその後の様子である。レンツは神を呪い、更なる虚無感にとらわれ、最後には「彼の中は恐ろしいほどの空虚」に支配され、「彼は何の不安も何の欲求ももはや感じなく」<sup>21)</sup>なる。彼にとって、神の不在はそれほどまでに大きなことであり、彼の中に広がる虚無は彼の人間性を決

定的に破壊してしまうほどの力と大きさを持っている。

上の引用に続く以下の二文で『レンツ』は締めくくられる。

彼にとって自分の存在は避けようのない重荷であった。—そのように彼は生きていった。<sup>22)</sup>

もちろん『レンツ』は未完であるが、「『そのように彼は生きていった』という文は、考える限り最も最後にふさわしい結末です」<sup>23)</sup>というノサクの言葉に見られるように、この結末は既にこれ以外のものは考えられないほど完成されている<sup>24)</sup>。レンツは、「名づけようのない不安」や「虚無」といったものから逃れ切れず、最後はそれにとらわれ、もはや何の抵抗をすることもなくただただ「空虚」に生き続けていくしかない。

それに対して、『狂人』の主人公は子どもたちが生き返らないと知ると、「ああ、これはだめだ。」「死んだものは死んだんだ。」<sup>25)</sup>と言い放ち、死体に集まる虫に刺されるのを嫌がってあっさりとその場を立ち去る。生き返らないことに対する悲嘆の気持ちも、神を呪う言葉も見られない。むしろルターの詩の賛美歌を歌いながら残忍な殺人を犯し、砕ける頭蓋骨から出る血が「彼をうっとりときさせ、一人の神とした」<sup>26)</sup>という時、彼は一人の殺人者であると同時に一人の神であり、ここでは神と人間の区別すらもはやなくなっている<sup>27)</sup>。その後男の興味は生き返らない子どもへと保たれ続けることはなく、自分が虫に刺されることへとあっさりと移行し、さっさとその場を去ろうとする<sup>28)</sup>。彼にとって宗教などは、殺人の際にリズムをつける歌程度の意味しか持たず、大事なのは今この時の自分の状況、虫に刺されてしまうということだけである。つまり彼にとって神の不在などは、はなから問題になってはおらず、それゆえ彼が孤独感を感じるのは、レンツのように神に見捨てられたと感じた時ではないのである。そうではなく大通りで誰も自分を気に止めてくれないという、あくまでも現世的な出来事において彼は「限りなく見捨てられているという感情」を持つのである<sup>29)</sup>。

この違いの理由は、一つにはビューヒナーとハイムの二人の詩人が生きた時代の違いに求められる。フィエートアによれば、レンツを造形したビューヒナーの拠り所となっているのは、不完全な自分を苦しめ続ける無慈悲な神への疑念であり怒りであり、そしてその疑念から生まれる苦しみである<sup>30)</sup>。だが、ビューヒナーが生きていた時代と違い、ハイムの生きた20世紀初頭の「神が死んだばかりか、神が生きていた時代への追憶も消えてゆき、神の死にさほどの衝撃も覚えなくなった時代」<sup>31)</sup>においては、そもそも神の不在は前提として自明のことであり、それゆえ神に見捨てられることすらあり

得ない。そこでは今自分が生きている世界が全てとなるが、その現世でも『狂人』の主人公を待っているのは、「限りなく見捨てられている」という孤独感である。今自分が生きている世界が全ての彼には神や天国といった逃げ場はなく、彼が孤独から逃れられる場所として唯一思いつくのはあれほどまでに嫌悪していた施設しかなかったのである。それはいわば、彼には逃げる場所とはもはやどこにも存在しないということに等しい。

しかし、彼が施設に戻りたいと思ったのは、見捨てられているという孤独感からだけだったのであろうか。そもそも施設の外に自分を気にかけてくれる人がいないなどということは、施設を出た時から彼にとっては分かりきったことだったはずである。もちろん孤独を想像するのと実感するのとでは大きな違いがあることは確かである。だが彼の施設への思いが変化する直前に、ある劇的な変化が彼に起こっている。その変化に注目することで、彼の施設に対する心情の変化にも違う背景が見えてくる。

その変化とは彼の記憶である。既に述べたように、彼がこの大通りをさまよっているのは、そもそも彼が記憶を失くし自分がどこにいるのかも分からなくなったからであった。彼が施設のことや妻のことを覚えていることを考慮すると、彼の記憶喪失がそれほどひどいものであるとは考えられない。だが彼が記憶を失くしていることは確かであり、この記憶の喪失という要素は注目に値する。なぜなら、記憶の喪失は彼の中の連続性の喪失を意味し、それはまた自分のアイデンティティを形成する重要な要素を失ったということの意味するからである。アイデンティティが二つの側面、つまり一つには「自己の空間的側面であって、他者や社会から、自己が自己であることが承認されていることを自分自身で信じられている、そのリアリティ」と、もう一つには「時間的側面であって、過去の自己と現在の自己とが同一の自己であるという確信」からなりたっているのならば<sup>32)</sup>、この大通りにいる時点で彼はそれらを両方とも失っていることになる。つまりこの主人公の男は誰からも自分を認識されなければならず、記憶を失うことにより過去の自己との連続性までも失っているのである。彼が施設へ帰りたいたく強く思うのは、記憶を失くし、周りの誰一人として自分を見向きもしてくれない今、そこにいけば少なくとも彼を知っている人がいて、自分が自分として認識され得るからではないだろうか。つまり、彼がこの場面でここまで痛切に施設に帰りたいたく願うのは、単に孤独からだけではなく、そこにアイデンティティの喪失という一人の人間としての存在を揺さぶられる問題が内在しているからなのである。

だがその施設は、監守たちが患者を犯し、熱湯に突っ込み、また死人を食肉工場に持ち込みソーセージにしようとするようなところであり、そこで患

者が一人の人間として扱われているとは到底思えない。ならばたとえ彼がそこに赴いたとしても、彼が一人の人間として扱われることはないのだから、彼のアイデンティティが取り戻されることは望むべくもないだろう。それはつまり、彼の逃げる場所が存在しないばかりか、彼が一人の人間としてアイデンティティを取り戻せる場所も、もはやどこにも存在しないということである。逃げ場がなく、自己同一性を失い自分自身すら持たない彼は、「恐ろしいほどの空虚」に支配されて逃れられず、「そのように生きてい」くしかなかったレンツともはやさほど変わらないようにも見えてくる。

## (3)

だが『狂人』の主人公は、「限りなく見捨てられているという感情」に襲われ、「郷愁」にあらん限りの力でつかまればつとも簡単に孤独に屈することはないし、ビューヒナーの作品の人物たちに見られるように、行動や抵抗することをやめてしまうこともない。ビューヒナーの作品で、虚無感を前にして何らかの抵抗の行動を取ることを止めてしまうのはレンツだけではない。革命家ダントンも王子レオンスも、そして『ヴォイツェク』に挿入されたメルヒェンの子どもも、虚無感に囚われた末に現状を打破するための思考や行動を停止してしまう<sup>33)</sup>。

それに対して『狂人』の主人公は、抵抗とまでは言えないものの最後の最後まで行動することを止めない。既に述べたように、記憶を失くし大通りで孤独を感じた男は、アイデンティティの喪失という危機に陥り、一度は「できるならばすぐに施設に戻りたい」と強く思うものの、その後すぐに思い直している。彼が施設に帰らない理由は、「やりたいことがちゃんとわかっている」し、「実際に片付けなきゃならないことがまだたくさん残ってる」<sup>34)</sup>からである。「やりたいこと」、「片付けなきゃならないこと」とは、おそらく彼の妻の問題であろう。妻であるならば、それは彼を最もよく知っている人物の一人と言ってもよく、施設に戻らずとも彼には、自分を自分と認識してくれる人物が残っていたのである。つまり記憶を失くしていたものの、彼は妻のことを思い出し、施設に戻ることを考え直すのである。

彼はその後、妻が化けていると思ひ込んだ鼠を相手に妻の家で大暴れをする。鼠である妻が彼を認めてくれるはずもなく、結局その後彼が行く場所は施設以外には残されていないように考えられる。だが、男が大暴れをし、駆けつけた二人の男をなぎ倒して広場まで逃げてきた時、彼は遠くに警官が数人いるのを見て「やつらはたぶん俺を探しているんだろう。俺を再び施設に戻そうとしてるんだ。」<sup>35)</sup>と思ひ、その場をすばやく離れる。施設は彼にとっ

て唯一残された自分を認めてくれる人々がいる場所であるにもかかわらず、そしてあれほど強く戻りたいと願ったはずの施設であるにもかかわらず、彼はここではまたそこに戻ることを拒否したこととなる。その理由は、直後の彼の台詞に見られる。つまり、「やつらは、俺のことを一人じゃやるべきこともできないやつだと思ってる」<sup>36)</sup>ということへの反発である。男は一度は孤独に心をとらわれ施設への帰還の強い思いを抱きつつも、一人で「やるべきこと」ができることを、やつらに見せてやろうと考えるのである。

見捨てられ、孤独であることを前提とし強く意識しつつも、なおそれにとらわれず抗おうとするこのような姿勢は、ハイムの「しかめ面」という詩の一節によく表れている。「僕たちの病気は僕たちの仮面である。／僕たちの病気は際限のない退屈である。」から始まるこの詩は、「僕たちの病気は決して一人でいられないことである。」「僕たちの病気は僕たちが自分たち自身に定めた神への不服従である。」「僕たちの病気は世界の日の終わりにその腐臭にもはや耐えられぬほど息苦しい夕暮れに生きていることである。」<sup>37)</sup>などと続き、ハイムの他の詩にも見られる「時代に対する絶望感」<sup>38)</sup>が漂うが、最後は「三たび『それにもかかわらず』と言い、三たび古参兵のように手につばを吐きかけ、そしてそれからさらに、西風のつくる雲のように、僕らの街路を通り去り、見知らぬものへと向かっていく。」<sup>39)</sup>と、わずかながら希望を感じさせる言葉で締めくくられる。この詩からは、ハイムの他の多くの作品に見られる終末論的世界観とそこからくる絶望感と共に、なんとかそれを打ち破ろうというささやかな抵抗の意志が見て取れる。

さらに『狂人』の男の、一人でやるべきことをしてやろうという意志には、一人の人間として自分を他者に認めさせたいという男の願望が見て取れる。記憶を失くした今、そうやって他者に自分を認識してもらうことだけが、彼にとって再びアイデンティティを取り戻す手段だからである。しかしその一方で、その抵抗の意志や願望からは具体的な手段は何一つ見えてこず<sup>40)</sup>、『狂人』においても「しかめ面」においても、「やるべきこと」はその後具体的に提示されることはない。結局『狂人』の主人公はさらなる殺人を重ね、射殺されるところでこの「醜悪さに満ちた作品」<sup>41)</sup>は終わる。

確かにビューヒナーの作品に見られる人物たちとは違い、ハイムの『狂人』や「しかめ面」には神の不在を自明のこととし、孤独感にも抵抗し何らかの行動を起こそうという意志は見えて取れる。だがレシュニツァーの言うように、「ハイムによって、新しいよりよき社会秩序の輪郭が明確に描かれることは確かに決していないのである」<sup>42)</sup>。それどころか『狂人』においては、その行動は脈絡のない残酷きわまる無差別殺人という形でしか現れず、希望とは程遠いと言わざるを得ない。

## (4)

だがその希望のない小説の筋とは裏腹に、『狂人』の主人公の心は、警官から逃げデパートに入った辺りから不思議なほどの至福の思いに包まれ、その心の平安は死ぬまで破られることはない。デパートを「素晴らしい教会」<sup>43)</sup>だと勘違いしている彼は、そこで「厳粛な気持ち」<sup>44)</sup>になり、先ほど知り合いの女性を殺した時は「ハイエナ」や「ジャッカル」といった「獣」だったのに、ここではまるで自分が「永遠の明るさに揺られながら大きく寂しい海上に行く一羽の大きな白鳥」<sup>45)</sup>になったかのような気分になる。さらに先ほどまでは「恐れを覚え」<sup>46)</sup>る存在だった太陽も、今では彼の「隣人」<sup>47)</sup>となる。その気持ちよさは、「どうしてこうまで素晴らしいのだろうか。」<sup>48)</sup>と自問してしまうほどである。教会と勘違いしたデパートで敬虔な気持ちになり、これほどまでに晴れ晴れとした気持ちになれるというのも、宗教の無力さとそれに伴う時代の世俗的なものへの傾倒を表していると言えるが、しかしだからと言って、世俗的なものが彼にとって何かの救いになるわけでもない。大通りの場面で述べたように、それは大きな孤独感を呼び起こすだけであり、彼にとっては何らポジティブなものとはなり得ない。ならば彼の心がこれほどまでに高揚し至福の思いに包まれた原因は一体何だったのか。考えられるのは、教会が持っていた役割でありイメージである「救済」と「死」のイメージである<sup>49)</sup>。

1907年6月6日の日記にハイムは次のように書いている。「最もよいことは生まれてこないこと。そしてその次によいことは、若くして死ぬこと。」<sup>50)</sup>ここからは、人間の生、そして世界そのものの無意味さと空虚さに対するハイムの嘆きの声と、そこから救われる唯一の方法は死であるという絶望の声が聞こえてくる。また違う日(1910年7月6日)の日記では次のような言葉を書き付けている。「いつか再びバリケードが築かれることがあるなら。僕はその上に立つ最初の人となり、さらに心臓に弾丸を受けて感動に酔うのを感じよう。」<sup>51)</sup>この世が無意味で空虚なものならば、ハイムにとっては死こそが自分にとって救いであり陶酔を与えてくれる憧れであった。ハイムの短篇小説でしばしば、死の間際絶望に陥らず、むしろ幸福感に包まれる人物が見られる理由はそこにある。『狂人』の主人公だけではなく、例えば『泥棒』の主人公も炎に包まれ死を目前にしながらも「大きな笑い声」<sup>52)</sup>を上げるし、『解剖』においては既に死んでいる男が、「白い死者の台の上で幸福のあまりかすかに震え」<sup>53)</sup> さえする。

『狂人』の主人公は、デパートで彼の最後の犠牲者となる女性の首を絞めながら緑の城の緑の庭園の幻影を見る。それは「幾筋かの震える日光の中で



隠れている緑の奥深いところに」<sup>54)</sup>あり、彼はそこまで潜って行きたいと思うのだが、彼の思いに反しそれはどんどん深く沈んで行き、とうとう「あそこまでは決して行けそうにはない。」<sup>55)</sup>と彼が泣き出してしまふほど離れていってしまう。緑の海底にある緑の庭園が何を意味するのかは定かではないが、それが彼にとって何らかの幸福のしるしなのは間違いないだろう。光の筋が見えることから、さらに救済の象徴であるとまで言ってもいいだろう。そして最後の場面で、男が「あそこまでは決して行けそうにはない」と思ったその直後、彼の頭を小銃の弾が貫き、それにより彼は、一度は「決して行けそうにはない」と思った「あの深いところへようやく自分が沈んでいくかのような気が」し、「彼の瀕死の心は、はかり知れない至福の中でうち震え」<sup>56)</sup>、この小説は終わる。死こそが、そして死のみが彼にとっては至福への道であり、全ての苦しみからの救済だったことをこの最後の文は示している。だからこそ死をイメージさせる教会（と彼が思い込んでいるデパート）に来たとたん、彼の心は高揚し幸福感に包まれたのである。彼にとって教会は「死」の象徴であり、また同時に「救済」の象徴に他ならなかった。だがここで実際に彼がいるのは教会ではなくデパートであり、そこにしか救済がないというのも皮肉である。しかもその救済も結局は死でしかなく、それはいわば救いのない救いでしかない。ここからは上に引用した日記と同様、ハイムの深い絶望の思いが見て取れる。

だが死と至福への予感に胸を高まらせる男の思考は、銃で撃たれて死ぬ直前に、彼が最も憎むべき施設へと一瞬向けられ、本稿の冒頭で挙げた文章が現れる。「今晚このことを病院の共同寝室で他のやつらに話してやったら、みんなすごく羨むだろうな。それが彼はうれしくて仕方がなかった。」この前半の文は体験話法で書かれており、男の心情がより直接伝わってくる文章である。そしてこの文章の持つトーンは、彼が施設へ思いをめぐらすそれまでの文章のものとは明らかに異なっている。施設への強い憎悪に支配された冒頭の思いとはもちろん、孤独に苛まれ施設に戻りたいと願った時のものとも違う。つまりここでは、憎しみや孤独といった負の心情ではなく、自分のすばらしい体験を他人に伝えたいという前向きな思いが、施設へ思いを馳せる源となっている。今まで施設を思い出す時には決して見られなかった「うれしくて仕方がなかった」という非常にポジティブな言葉が出てくることから、そのことは理解される。至福の死への予感でいわば躁状態にある彼にとって<sup>57)</sup>、冒頭では「きちがいたち」と呼んでいた他の患者も、ここでは共同の部屋で寝ることが自然で、そんなことは全く厭わないほどの仲間たちであり、孤独感は微塵も感じられない。さらに「みんながすごく羨むだろう」という言葉からは、他の患者に対する彼の優越感が読み取れる。これはとり

もなおさず、彼が他の患者から認められているということに他ならず、彼が孤独感をもはや感じていないのもこのことから説明がつく。彼の想像の中では、既に彼は他人が羨むような一人の人間として認められており、それは彼の孤独感の解消と共に、彼にとってはほとんど失われかけていたアイデンティティの獲得をも意味する。ならば彼がたどり着きたかった「緑の庭園」とは救済の象徴であると共に、まさにこのアイデンティティの比喩だったとも考えられる。

## (5)

だが「みんながすごく羨むだろう」というのは、もちろん彼が勝手に想像したことにはすぎない。既に述べたように、アイデンティティの獲得に必要なのは、一つには他者から自分の存在を認められているという「リアリティ」であるが、既に現実と区別がつかなくなっているらしい主人公にとって、この想像は現実と同等のリアリティを持っており、この想像に支えられてアイデンティティの獲得が行われるということは、何ら不思議なことではないだろう。しかし想像上とはいえ、施設に対するこのポジティブな言葉が、唐突に出てきた感は否めない。そこにはそのような想像に彼を至らしめた何らかの契機があったのではないだろうか。

スチュアート・ホールはアイデンティティについて、それは決して統一された単一のものではなく、様々な対立する言説や実践などから多様に構成されるものであると述べ、現在は強制的な移住、自由な移住のプロセスとも関連させて考えねばならないと主張する<sup>58)</sup>。その際「問題なのは、『私たちが何者なのか』『私たちはどこから来たのか』ということではない。重要なのは、私たちが何になることができるのか、私たちがどのように表象されてきたのか、その表象は私たちが私たち自身をどのように表象できるかということにどれほど左右されているのかということ」<sup>59)</sup>である。

施設からおそらくは半ば強制的に、半ば自由意志で出てきたこの男<sup>60)</sup>にも同じことが当てはまる<sup>61)</sup>。緑の庭園の比喩から考えるに、彼のアイデンティティは最終的に死ぬことによって完全に獲得されるものと考えられる。しかも彼は銃弾を受け至福の思いに包まれる直前に、一度は「あそこまでは決して行けそうにない」と思っている。教会（と彼が思っているデパート）に入り、既に死の予感に胸を高鳴らせていたにもかかわらず、救済の象徴である緑の庭園に行けないと彼は感じているのである。つまり男は単純に死ぬことによって、緑の庭園に行きつく（＝アイデンティティを獲得する）ことができるわけではないのである。なぜなら彼にとって大事なものは既に、ホールの

言葉を借りるなら、今現在自分が「何者なのか」ということではない。そうではなくて、今後「何になることができるか」だからである。そして死を目前にした男にとって、それは言い換えれば、どのように死ぬのかということに他ならず、それは単なる死であってはならなかった。つまり狂気に身を任せた無差別で残忍な殺戮の末の射殺というこの尋常ならざる死こそが彼の求めていたものであり、また逆に彼のその残虐な殺人行為はただこの死のためであったと行うことができるだろう。

それこそが彼の求めていた死だったということは、銃弾を受ける直前には彼は、「あそこ（緑の庭園）までは決して行けそうにない」（かっこ内は筆者による）と考えていたのに、銃弾を受けた直後に一転して、「あの深いところへようやく自分が沈んでいくかのような気が」し、到達への充足感を感じていることから理解される。つまり彼は、凶行を繰り返し、一人の「狂人」として他人に認識され、「狂人」として射殺されることにより初めて、目指す緑の庭園へと向かうことができたのだ。

そもそも彼は最初から「狂人」だったわけではない。物語の序盤ではこの主人公は「彼」という名称しか与えられておらず、物語の中盤で子どもを二人と女性を一人殺し一人の老人に「殺人者」として認識された直後に初めて、彼はこの物語中でその呼び名を与えられるのである<sup>62</sup>。つまり彼は他者から「殺人者」、「狂人」として認識されることで初めて「狂人」となる可能性を持ち、「狂人」として自分を他者から区別する呼び名を獲得する可能性を持ったのである。

ここから見えてくるのは、誰にも一人の人間としての自分の存在を認められず、狂った殺人犯として認識され射殺されることで初めて一人の人間として他者に認識される男の姿である。この居場所をなくし自己の存在意義とアイデンティティを失くした弱者である男は、目を覆いたくなるような凶行によってのみ社会にも自分にも自己の存在を認めさせることができた、もしくは認めさせようとしたのである。そこには社会から取り残された人間が、反社会的な行為によって初めて社会にその存在を認められるという逆説が見て取れる。『狂人』の主人公の反社会的な行為は、彼にとってはしかし決して非社会的な行動ではなく、あくまでもアイデンティティの確立という極めて社会的な動機から行われたものであった。この点に気が付いた時に初めて、このグロテスクで残忍な物語の主人公の意識と読者のそれとが重なる可能性が生まれてくるのである。

このアイデンティティの問題は、ハイム自身のアイデンティティの問題との関連で考えることもできる。ハイムは両親からは法律を学ぶことを望まれており、彼の書いたものは全く認められなかった。検事の父は文学の

価値を一切認めず息子にも法律の道を強要するような家庭内専制君主だったし、母もまた息子の書くものの価値を認めようとはしなかった<sup>63</sup>。またハイムは「プロイセンのクズ国家は、僕を何ものにもさせてくれない。」<sup>64</sup>と日記に書いているが、これはつまり、ハイム自身が現在の自分を「何もの」でもないと考えていたということに他ならない。ここには外からも内からも否定される彼のアイデンティティの問題が見て取れる。死の二ヶ月ほど前に書かれた日記には、「もし僕があんな豚野郎の父を持っていなかったら、僕は偉大な詩人の一人になっていたのに。」<sup>65</sup>と父への罵りと共に、なりたいた自分になれなかったことへの悔しさが綴られており、ハイムにとってそれが死ぬまで解決することのない問題であったということが見て取れる。

さらに1911年10月15日の日記にはハイムは次のように書いている。

ああ、僕はこの陳腐な時代に行き場のない激情を持て余し、窒息してしまう。僕が幸せであるためには凶暴で外的な感情が必要だ。僕は目が覚めたまま夢想して、自分がダントンやバリケードの上に立つ男のようにしているのを見る。ジャコバン党員の帽子がない自分など、実際のところ全く考えられない。せめて今戦争が起きてくれればいいのに。<sup>66</sup>

これらのことから、『狂人』の主人公の失われたアイデンティティと至福の時を求める凶暴で破滅的な行動と、ハイム自身のアイデンティティの問題との関連が見て取れる。ハイムの心の内にもこの主人公同様、狂的な行動への衝動が存在していたのである。ならば少なくともハイムにとっては、この主人公は決して「感情移入するのが不可能」な人物などではなかったであろうし、むしろハイムは自分自身の姿と思いを重ねつつ、この「狂人」としか名付けられ得なかった男を描いたと考えられる。

一見すると無軌道で不条理に思われる主人公の男の心情の変化と行動に対する、主人公の男のみならずハイム自身のこれらの動機が見えてくると、ごく単純に付けられたように思われるこの小説のタイトルまでもが意味深長なものとなってくる。つまりこの物語の『狂人』というタイトルそのものが既に、物語の主人公である男がぎりぎりのところでようやく獲得したアイデンティティのしるしであると共に、自分が獲得できなかったアイデンティティへのハイム自身の狂氣的切望の表れなのである。

## 注

ハイムの引用は、Heym, Georg: Dichtungen und Schriften, Gesamtausgabe, hrsg. von Karl Schneider. Hamburg. Bd. 1: Lyrik, 1964, Bd. 2: Prosa und Dramen, 1962, Bd. 3: Tagebücher Träume Briefe, 1960. を用い、注においては D.S. という略号を用いた。

- 1) Vgl. Martini, Fritz: Deutsche Literaturgeschichte: von den Anfängen bis zur Gegenwart, 17. Auflage. Stuttgart 1978, S. 541 f.
- 2) 杉田貞子「ハイム『狂人』」『ドイツ短篇小説の展開』ドイツ文学叢書, 1980年, 178頁。
- 3) D.S. Bd. 2, S. 19.
- 4) Vgl. D.S. Bd. 2, S. 25 f.
- 5) D.S. Bd. 2, S. 19.
- 6) D.S. Bd. 2, S. 20.
- 7) D.S. Bd. 2, S. 20.
- 8) D.S. Bd. 2, S. 20.
- 9) D.S. Bd. 2, S. 33.
- 10) 仲井幹也「ゲオルク・ハイムの『狂人』における醜悪さの美的機能について」『西日本ドイツ文学 第13号』2001年, 66頁。
- 11) D.S. Bd. 2, S. 23.
- 12) D.S. Bd. 2, S. 25.
- 13) D.S. Bd. 2, S. 25.
- 14) D.S. Bd. 2, S. 28.
- 15) Vgl. Goltschnigg, Dietmar: Rezeptions- und Wirkungsgeschichte Georg Büchners. Darmstadt 1975, S.170 ff. ; Boonruang, Tawat: Die Rezeption von Büchners „Lenz“ in Georg Heyms „Der Irre“, University of California. Santa Barbara 1987, S.84 ff.  
またハイムは日記に度々ビューヒナーの名前を挙げ、模範とするべき詩人として称えており、その点からもハイムがビューヒナーの影響を受けていることは確かなことと言える。
- 16) Boonruang, Tawat: a. a. O., S. 121 ff.
- 17) Büchner, Georg: Sämtliche Werke und Briefe. Historisch-kritische Ausgabe mit Kommentar, hrsg. von Werner R. Lehmann. Hamburg. Bd. 1: Dichtungen und Übersetzungen, mit Dokumentationen zur Stoffgeschichte, 1967. Bd. 2: Vermischte Schriften und Briefe, 1971. Bd. 2, S. 93. 以下このテキストからの引用は HA という略号を用いる。

- 18) HA, Bd. 2, S. 80.
- 19) 神が存在するのならば、なぜこの自分たちの痛みや苦しみを取りのぞいてくれないのかという宗教批判は、ビューヒナーの他の作品にも見られる。最も直接的にそのことについて書かれているのは、『ダントンの死』の中の以下のペインの発言であろう。「悪は否定できるが、苦しみを否定することはできない。神を証明できるのは理性だけで、そして感情はそれに逆らう。覚えておくといいアナクサゴール、なぜ俺は苦しむんだ？これが無神論の厳さ。ほんの少しでも痛みが走ったら、それがたった一つの原子の中で生じたもののだとしても、それは創造に致命的な亀裂を与えることになるんだ。」(HA, Bd. 2, S. 48.)
- 20) 以下子どもを生き返らせようと試みた後の『レンツ』と『狂人』の二人の主人公の違いについては、上掲書、仲井幹也「ゲオルク・ハイムの『狂人』における醜悪さの美的機能について」を参照した。
- 21) HA, Bd. 2, S. 101.
- 22) HA, Bd. 2, S. 101.
- 23) Büchner-Preis-Reden 1951-1971, Reclam Nr. 9332-34. Stuttgart 1972, S. 106.
- 24) 同じことは『ヴォイツェク』についても言えるかもしれない。Vgl. 池田絢一「ビューヒナーのドラマトゥルギー —『ダントンの死』と『ヴォイツェク』—」『鹿兒島大学人文科学論集 29 号』1989 年, 90 頁。「『ヴォイツェク』が未完に、未整理に終わったのは、……さまざまな理由が考えられるでありましょうが、わたくしはそのドラマトゥルギーから言って、そもそも根本的に完成はむづかしかつたと想像します。……。しかし、それだからこそまさにそれは、断片のダイナミックな集積、いや結合として、……その圧倒的印象と、強烈なインパクトを獲得しえたのであり、開かれた形式には稀に見る悲劇性の高みに達しえたのであります。」
- 25) D.S. Bd. 2, S. 24.
- 26) D.S. Bd. 2, S. 23.
- 27) 杉田貞子：上掲書, 178, 179 頁参照。
- 28) D.S. Bd. 2, S. 24.
- 29) 『泥棒』の主人公も同じように群衆の中で孤独を自覚する。彼はルーブル美術館で、モナ・リザを感嘆と共に鑑賞する群衆を見て、モナ・リザに敵意を持つ自分が一人孤立していることを認識する。(Vgl. D.S. Bd. 2, S. 77 f.)
- 30) Viëtor, Karl: Büchner, Politik · Dichtung · Wissenschaft, Bern 1949, S.172.
- 31) 杉田貞子：上掲書, 186 頁。
- 32) 石原千秋『テキストはまちがわない——小説と読者の仕事』筑摩書房 2004 年, 126 頁。なお本論文における、主人公の殺人という反社会的な行為が、

自我の獲得という極めて社会的な動機から行われたものであるという論は、扱っている素材は違うもののこの本に既に見られ、本論文はそこから多くの示唆を得た。(同書 103 頁参照)

- 33) 例えばダントンは、処刑を眼前に控え安らぎは神の中にあるとするフィリポに対して、最高の安らぎは虚無の中にあり、神は虚無そのものであると反論する (HA, Bd. 2, S. 60 f.)。虚無に身を委ねたダントンは、絶望とも諦めともつかない心情のまま、その後何らかの行動を起こすことなく全てを諦め、処刑されるのをただ待つのみである。また『レオンスとレーナ』では、掴んだ砂の数が偶数か奇数かの賭けをする以外やることがないほどに、決められた日常に退屈を感じていたレオンスは、そこから抜け出そうと試みるものの、結局は彼が言うところの、人間が「退屈のあまり祈りを捧げる」(HA, Bd. 2, S. 106.) 神の意志により、「ちっぽけな王国」で「一年中薔薇とつばみの間に、オレンジと月桂冠に埋まって暮らす退屈な日々生きることを受け入れる (HA, Bd. 2, S. 134.)。ここにもまた無神論と虚無感の末に思考や抵抗を停止してしまう様子が見て取れる。しかしビューヒナーの作品中で圧倒的な虚無感を感じさせるのは、『ヴォイツェク』に挿入されたメルヒェンに他ならない。この矛盾と不条理に満ちた「結局のところ何の光も、打開策も、解決もなく、ただ救いのない孤独のみしかない」(Viëtor, Karl: a. a. O., S.208.) おとぎ話から感じられる虚無感は無神論の圧倒的と言ってよいだろう。ビューヒナーの作品の人物はこの子どもに代表されるように、誰もがその虚無の前で思考と行動を停止させざるを得ないのである。
- 34) D.S. Bd. 2, S. 28.
- 35) D.S. Bd. 2, S. 31.
- 36) D.S. Bd. 2, S. 31.
- 37) D.S. Bd. 2, S. 173.
- 38) Martini, Fritz: a. a. O., S. 541.
- 39) D.S. Bd. 2, S. 174.
- 40) フランツ・レシュニッツァーは、「ハイムの主人公は誰もがみな、その人生においてぼろぼろになりつつも、ただ時おり、結局は無駄に終わるものの、彼らを取り巻くものの残酷さと不合理さに対して激しく抵抗する人間なのである。」と述べている。(Leschnitzer, Franz: Georg Heym als Novellist, in: Das Wort. Literarische Monatschrift 1936-1939. Neudruck in 11 Bände, 1969. Bd. 5. Heft10, S. 27.)
- 41) 仲井幹也：上掲書，68 頁。
- 42) Leschnitzer, Franz: a. a. O., S. 28.
- 43) D.S. Bd. 2, S. 31.

- 44) D.S. Bd. 2, S. 32.
- 45) D.S. Bd. 2, S. 32. マウツは主人公にハイエナと鳥の二つの動物の比喩が使われていることに触れ、前者をネガティブな比喩、後者をポジティブな比喩としている。Mautz, Kurt: Georg Heym, Mythologie und Gesellschaft im Expressionismus, Frankfurt am Main 1972, S. 108.
- 46) D.S. Bd. 2, S. 22. 『狂人』が収められている短編集『泥棒』の中の他の短篇でも、太陽はしばしば馴染みのない不気味なもの、恐ろしいものとして描かれている。例えば『十月五日』では「薄気味悪い穴の中で、彼らが太陽について何を知っていたらどうか。彼らは時々太陽が町の上を通過して向こうへ漂って行くのを見た。それは霧でばやけ、厚い雲に蔽われており、それを一時間か二時間見るのであった。そしてその後、それは消えてしまうのだった。」(D.S. Bd. 2, S. 10.) と書かれ、『船』では「彼の頭のてっぺんに太陽が立っていて、彼にはその頭が炎でいっぱい巨大な赤い塔のように思われた。」(D.S. Bd. 2, S. 61.) とか「そして上空、天頂では、太陽がまるで白く燃える鉄の巨大でどろどろした塊のように溶けて流れ出していた。いたるところで太陽が空をつたって滴り落ち、いたるところにその炎がべたべたとくっついていて。空気が燃えているようだった。」(D.S. Bd. 2, S. 62.) などと描かれる。
- 47) D.S. Bd. 2, S. 32.
- 48) D.S. Bd. 2, S. 33.
- 49) Vgl. Chevalier, Jean und Gheerbrant, Alain: A Dictionary of Symbols, Oxford 1994, S. 192. これによれば、「キリスト教は万物の基本的なシンボルの総合体」であり、それゆえ「墓と復活」などの正反対の象徴となり得るし、またもちろん「救済」のシンボルでもある。そして同じことは教会建築にもまた当てはまるとしている。
- 50) D.S. Bd. 3, S. 89. これは、ニーチェが『悲劇の誕生』で触れた、ミダス王に捕らえられたシレノスの言葉を想起させる。ニーチェはこれを „die silenische Weisheit“ と名付けた。もとはギリシャの民話に由来し、ミダス王の「人間にとって最もよいもの、もっとも願わしいものは一体何だと思うか」という問いに対するシレノスの返答であった。
- 51) D.S. Bd. 3, S. 139.
- 52) D.S. Bd. 2, S. 97.
- 53) D.S. Bd. 2, S. 37.
- 54) D.S. Bd. 2, S. 34.
- 55) D.S. Bd. 2, S. 34.
- 56) D.S. Bd. 2, S. 34.
- 57) 躁状態では、自制心の喪失、高揚感、自信過剰などの症状が見られる



(Brockhaus Enzyklopädie in 24 Bänden. Mannheim, Bd.14. S. 144.) 他, 「自我感情の高揚感, 万能感から誇大妄想が発達し, 社会的逸脱行為に走る」傾向が見られる(『世界大百科事典 第6巻』平凡社, 1988年, 378頁)。とすると, この主人公は物語の冒頭から既に躁状態にあり, ここでそれが頂点に達していると見ることができる。また鬱病では「悲哀, 絶望感, 不安, 焦燥, 苦悶感, 精神活動の抑制, 自殺観念, 自殺企図」(『世界大百科事典 第16巻』平凡社, 1988年, 225頁)などの精神状態が見られる。『狂人』の主人公はその感情と行動の起伏の激しさから, 躁鬱病の傾向が顕著であると言えるだろう。

これから死にゆく予感に震える人間が, 「今晚」のことを考えるという一見奇妙な行為にもこの躁状態が影響しているとも考えられるし, また切羽詰った場面や大事な場面でこのような理屈に合わないことを考えてしまうというのも, 往々にしてあり得ることであるようにも思われる。

- 58) Hall, Stuart: Who Needs 'Identity'?, in: Questions of Cultural Identity, edited by Stuart Hall and Paul Du Gay, London 1996, S. 3 f.
- 59) ebd. S. 4.
- 60) 例えばブーンルワンは, 主人公の男の病気が治らないにもかかわらず, とにかく発作的殺人から施設を守るために男は退院させられたと考える (Vgl. Boonruang, Tawat: a. a. O., S. 146.)。他方で男の方も施設を嫌っていたのは, 既に述べたとおりである。
- 61) ホールはもちろんポストコロニアリズムの視点に立って述べているのだが, 居場所を失いあてもなくさまよい, それとともにアイデンティティが失われていくという点を考慮すると, ホールの指摘は『狂人』の主人公に関して考える時にも非常に示唆に富んでいる。
- 62) D.S. Bd. 2, S. 26.
- 63) D.S. Bd. 3, S. 175 f.
- 64) D.S. Bd. 3, S. 146.
- 65) D.S. Bd. 3, S. 171.
- 66) D.S. Bd. 3, S. 164.

## Georg Heyms Erzählung *Der Irre*:

### Über den Wunsch der Wiedererlangung der Identität

TAKEUCHI, Takushi

Dieser Aufsatz behandelt die Erzählung *Der Irre* von Georg Heym und zeigt durch die Veränderung der Stimmung bzw. Einstellung der Hauptfigur gegenüber der Nervenheilanstalt, dass man hinter dem grausamen und mit Wahnsinn erfüllten Handeln das aktuelle Problem erkennen kann, das im engen Zusammenhang mit Heyms seelischer Verfassung steht.

Am Anfang der Novelle ist der Mann von Zorn über das Personal in der Anstalt, aus welcher er entlassen wurde, erfüllt. Der Ärger ist so heftig, dass er alle miteinander umgebracht hätte, wenn er dort weiter hätte bleiben müssen. Er nennt die Patienten in der Anstalt verächtlich die „Verrückten“. So kann man verstehen, dass er darunter litt, mit den Leuten in der Anstalt, ob mit dem Personal oder den Patienten, zusammen zu sein. Nachdem er unmittelbar nach seiner Entlassung zwei Kinder und eine Frau ermordet hat, geht er eine Straße entlang. Da überkommt ihn „das Gefühl einer grenzenlosen Verlassenheit“, und er denkt, „Am liebsten wäre er auf der Stelle zur Anstalt zurückgelaufen“. Aber seine Einsamkeit ist nicht der einzige Grund, sich die Rückkehr in die Anstalt zu wünschen. Zu diesem Zeitpunkt fehlen ihm zwei Elemente, die seine Identität formen. Das eine ist sozusagen das räumliche Element – die Realität, innerhalb welcher er von anderen und der Gesellschaft als er selbst angesehen wird. Das andere ist sozusagen das zeitliche Element – die Überzeugung, dass er in der Gegenwart dieselbe Person ist, die er auch in der Vergangenheit gewesen ist. Dem verlassenen Mann fehlt nicht nur die Beziehung zu anderen Menschen, sondern es ist ihm auch das Gefühl der Ich-Kontinuität abhanden gekommen. Weil er in der Anstalt, obwohl er jetzt kein Gedächtnis und keine Bekannten hat, von jemandem erkannt werden kann, wünscht er sich sehnlich, dorthin zurückzukehren. Aber dort werden die Patienten schlecht und nicht als Menschen behandelt; gleichwohl kann er in dieser Umgebung, wenn auch unter Schwierigkeiten, seine Identität wiedererlangen. Um zu erreichen, wieder in die Anstalt aufgenommen zu werden, mussten seine neuerlichen Handlungen gefährlich und verderblich sein. Er begeht noch mehr wahllose Morde, und es sieht um ihn ganz hoffnungslos aus.

Aber nachdem er in ein Kaufhaus hinein gelaufen ist, füllt wundersames höchstes Glück sein Herz aus. Er verwechselt das Kaufhaus mit einer Kirche. Hoffnung auf

Erlösung – und hier erscheint die Kirche symbolhaft für christliche Erlösungslehre – ist der Grund seiner gesteigerten Stimmung. Am 6. Juni 1907 schrieb Georg Heym ins Tagebuch: „Das Beste ist, nie geboren werden, und danach, jung sterben.“ Hier kann man seine Verzweiflung über die Bedeutungslosigkeit und Leere des Lebens und der Welt und seine Auffassung, dass die einzige Hoffnung der Tod ist, heraushören. Deshalb kann man in seinen Novellen die Figuren erleben, die sich angesichts ihres unmittelbar bevorstehenden Todes nicht der Verzweiflung hingeben, sondern von einem Glücksgefühl erfüllt werden. Zum Beispiel lacht die Hauptfigur in *Der Dieb* laut, ergriffen von den Flammen kurz vor seinem Tod, und in *Die Sektion* zittert der schon gestorbene Mann „vor Seligkeit auf seinem weißen Totentisch“. Aber dem Mann in *Der Irre* bedeutet der Tod nicht einfach Erlösung.

Im Kaufhaus hält der Mann eine Frau als sein letztes Opfer am Genick fest, sieht die Illusion der „grünen Gärten“ in „ein paar zitternden Sonnenstrahlen“, und unmittelbar bevor er erschossen wird, denkt er: „Wenn er das den andern erzählen würde in der Anstalt, heute Abend in den Schlafsälen, die würden schön neidisch sein.“ Die Gärten sind für ihn zweifellos ein Symbol der Glückseligkeit, und beim Nachdenken über die Sonnenstrahlen können sie ein Symbol der Erlösung sein. Hier ist es für ihn schon natürlich, dass er diesen Abend in die Anstalt zurück fährt. Außerdem ist der Antrieb hier, anders als vorher, eine positive Vorstellung, die sich mit der Anstalt verbindet, und zwar seine schönen Erfahrungen den anderen dort mitzuteilen; negative Gefühle wie Hass oder Einsamkeit sind vollkommen abwesend. Außerdem kann man durch seine Worte „die würden schön neidisch sein“ sein Überlegenheitsgefühl herauslesen. In der Anstalt wird er von den anderen Patienten anerkannt.

Kurz vor seiner Erschießung denkt er einmal weinend, dass er ja niemals dahin (in den grünen Garten) kommen wird. Obwohl er schon in der Kirche ist (so glaubt er nun fest, aber eigentlich befindet er sich im Kaufhaus) und von der Ahnung des Todes aufgeregt ist, denkt er gleichzeitig, dass er den grünen Garten als Symbol der Erlösung niemals erreichen kann. Das heißt, er kann nicht einfach durch den Tod dahin gelangen und eine Identität bekommen. Stuart Hall (1996) schreibt über Identität, eigentlich gehe es dabei um den Prozess des Werdens und weniger um ein Sein. Man solle sich nicht aufhalten mit Fragen danach, wer wir seien oder woher wir kämen, sondern vielmehr danach fragen, was wir werden könnten. Für den Mann kurz vor dem Tod heißt das, was er werden kann, nichts als „wie er stirbt“, und das muss kein einfacher Tod sein, sondern ein Tod durch Erschießen als Folge des von Wahnsinn getriebenen grausamen wahllosen Mordens. Das ist der Tod, den er wünscht. Das kann man daraus verstehen, dass es ihm erst, nachdem auf

ihn geschossen wurde, war, „als sänke er nun in die Tiefe“ und er große Erfüllung fühlte, während er zuvor dachte, „er wird ja niemals dahin kommen.“ Nach dem Blutvergießen erst würde er das Ziel erreichen, als der Irre erkannt und als der Irre erschossen zu werden. Hier kann man das Paradoxon sehen, dass ein von der Gesellschaft zurückgelassener Mensch erst durch zerstörerische Taten von der Gesellschaft wahrgenommen wird. Aus dem sozialen Motiv, dem Wunsch nach Wiedererlangung der Identität, resultieren jene in jeder Hinsicht gegen die Grundsätze, auf denen die menschliche Gemeinschaft basiert, gerichteten Taten der Hauptperson in Georg Heyms Erzählung.

Das in dieser Erzählung dargestellte Problem der Identitätskrise steht in Beziehung zu der Identitätskrise Georg Heyms. Sein Vater, ein Staatsanwalt, hat niemals die Literatur anerkannt und seinen Sohn gezwungen, Jura zu studieren, obwohl er Dichter werden wollte. Seine Mutter hat auch nie hoch geschätzt, was Heym geschrieben hatte. Georg Heym schrieb am 22. Oktober 1910 ins Tagebuch: „der elende preußische Dreckstaat lässt mich zu nichts kommen.“ Das heißt, dass Heym selbst dachte, dass er wertlos sei. So mangelte es ihm an Selbstschätzung, und von anderen hat er auch keine Anerkennung erfahren. Außerdem schrieb er am 15. September 1911 Folgendes ins Tagebuch: „Mein Gott – ich ersticke noch mit meinem brachliegenden Enthusiasmus in dieser banalen Zeit. Denn ich bedarf gewaltiger äußerer Emotion, um glücklich zu sein. [...] Ich hoffte jetzt wenigstens auf einen Krieg.“

Daher kann man verstehen, dass die destruktiven Taten der Hauptfigur in *Der Irre* in enger Beziehung mit der Identitätskrise Heyms stehen. Dann ist schon dieser Titel *Der Irre* ein Ausdruck der Identität, die die Hauptfigur endlich bekommen konnte, und gleichzeitig artikuliert sich darin jene Sehnsucht nach Identität, die Heym nicht bekommen konnte.